報　告

映画資料展「Moving Text ―映画資料を読む―」開催報告

静岡文化芸術大学図書館・情報センター
土　屋　麻　子

はじめに

静岡文化芸術大学（以下、本学）では、2013年３月、静活株式会社から、雑誌、映画パンフレット、脚本、図書等合計約5,000点の映画関係資料の寄贈を受け、約７年間図書館・情報センター（以下、当館）にて整理業務を行ってきた。整理業務を行うなかで、2018年12月、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムへの所蔵調査[1)]依頼に協力し、2021年２月には『全国映画資料館録2020』[2)]に当館が掲載された。これらの活動を経て、2021年３月、本学ギャラリーにて、映画資料展「Moving Text ―映画資料を読む―」を開催した。

本展覧会は、「令和２年度静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム等開催費」の採択を受け、本学デザイン学部、文化政策学部教員３名の企画・運営総括の下、当館の職員、デザイン学部実習指導員と協働で準備し実施したものである。会期中は本学関係者や地域の方々をはじめ、全国から映画を専門とする研究者や制作関係者にもご来場いただき、展示資料だけでなく、より詳細の資料を見たいという意見も寄せられた。

本稿では、第１章で展覧会を企画した意図を述べる。第２章では展示計画を説明し、第３章で展覧会概要を報告する。第４章では来場者の声をアンケート結果を踏まえて紹介する。

１．企画意図

1.1　静活株式会社と映画資料寄贈の経緯

本学へ映画資料を寄贈した静活株式会社（以下、静活）は、1919（大正８）年、静岡市七間町に静岡活動写真株式会社として創業し、1958（昭和33）年には静岡市中心部で14館の映画館を経営していたが、2011（平成23）年10月、静岡市内のすべての映画館をシネマ・コンプレックスへ移行した。これを機会に、静活が所蔵していた多数の映画関係資料は、本学だけでなく、映画を専門とする全国の公的機関へ寄贈された。

本学で寄贈を受けた映画資料は、1930年代から2000年代までに制作された雑誌53タイトル約3,500冊、映画パンフレット約1,400冊、脚本277冊、図書50冊、映画フライヤー176枚、映画鑑賞券135枚、合計約5,000点に及ぶものであった。

1.2　資料の背景

資料の整理はその種類の多さゆえに難渋したが、作業が進むにつれ、いくつかの発見があった。

第一に、浜松にゆかりのある映画人で映画編集者の浦岡敬一[3)]が関わった作品の脚本、映画パンフレットが一定数あること。第二に、脚本には、作品の企画段階から決定稿にいたるまで複数のバージョンがあり、使用者の書き込みのあるものが散見されること。第三に、映画パンフレットには、制作された年代によっては、ひとつの作品においてデザインや掲載内容の異なるものが存在すること。第四に、静活での上映作品群だけなく、都内ミニシアターで上映され発行した映画パンフレットが多数存在すること。第五に、1950年代の日本映画作品の資料が殆ど見当たらないこと。以上の５点である。

資料を何度も見ているうちに、発見が疑問へと変わり、それを解決するために調査が始まる、という日が続いた。整理作業が終盤にさしかかった頃、私は、これらの資料を、学内で映画愛好者が個人の楽しみとして閲覧するだけでなく、映画や映像表現に関わる学生、研究者、一般の方々へ公開し、地域の文化資源として共有することが大切

だと考えるようになった。また、脚本や映画パンフレットの目録作成が難航したことから、全国の映画関係機関や映像アーカイブ組織へ当館の映画資料収蔵を告知し、資料の保存と活用のために連携してネットワークを構築することが必要だと感じた。

以上の経緯から、寄贈映画資料を学内外へ公開する「教職協働の展示計画」がスタートした。

２．展示計画

2.1　予算

当館には、展示やイベント開催の予算がないため、展覧会を開催するために必要な経費は、デザイン学部教授である図書館・情報センター長（当時）に相談し､「令和２年度静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム等開催費」に申請することとなった。その結果、400,000円で採択が決定した。

2.2　体制

2020年２月、予算獲得のために展覧会プロジェクトを結成した。構成員は図書館・情報センター長（当時）であるデザイン学部教授（メディア・アート、インタラクションデザイン）のほか、デザイン学部講師（映像表現）、文化政策学部教授（文化社会学、メディア論）が展覧会の企画・運営を総括し、資料の選定と管理について筆者を含む当館の職員２名が担当することとなった。

事業採択決定後、上記メンバーの他、展覧会のデザイン全般を担当するチームが編成され、最終的に展示体制は以下のような構成となった。

・企画・運営総括：池田泰教（デザイン学部講師、実施代表者）、加藤裕治（文化政策学部教授）、的場ひろし（デザイン学部教授）
・資料選定・管理：土屋麻子、井出直樹（図書館・情報センター［大学事務局情報室図書係］）
・グラフィックデザイン：博多哲也（デザイン学部実習指導員）
・空間構成：髙部亘、根木隆之（デザイン学部実習指導員）、池田泰教（前掲）

2.3　目的

1.2 資料の背景で述べたことと重複するが、展覧会の目的は以下のとおりである。

・図書館・情報センターに収蔵された映画資料を学内外へ公開することで、学生や研究者のみならず地域へ学びの場や大学と交流する機会を提供すること。
・本学図書館・情報センターへの映画資料収蔵について、国内の映画関係機関や映像アーカイブ組織へ告知し、資料の保存と活用の連携を図ること。
・展覧会をとおして学内での図書館・情報センターの存在意義を高め、大学の広報へつなげること。

2.4　構想

７月上旬から始まったプロジェクトメンバーによるミーティングでは、展示内容について何度も話し合いが行われ、展示コンセプト、展示タイトルは池田の発案により、以下のように決定した。

「雑誌、パンフレット、脚本、映画館プログラムなど様々な媒体の映画資料を、解釈が固定された懐古的なものと捉えるのではなく、今もなお読み手との関わりのなかで変化や運動を続ける“動いているテキスト”として見直すことで、作品の新たな価値を見出し、それに伴う豊かな表現を発見する。」展示タイトルは「Moving Text ―映画資料を読む―」とする。

また、このコンセプトに沿って、次のアイデアが取り入れられた。

・鑑賞者が展示資料（テキスト）を自由に手に取って読むことができるようにする。
・図書館とは異なる空間（展覧会）でテキストを読む体験が、映画作品への造詣を深め、鑑賞者の自発的な学びにつながるように、会場周辺に関連書籍を置き、図書館の蔵書へナビゲートする仕組みを取り入れる。
・展示什器は既存のものを使用せず、上記コンセプトに合致したものを制作する。
・会期中、会場の近くで映画関係者の講演会を開催し、一般の聴講を可能とする。

2.5　展示テーマと個々の役割

展示コンセプト決定後、ミーティングでは、個々の作業の進捗状況について情報の共有を図りながら、展示テーマと展示資料数について意見交換が行われた。展示テーマは、セクション１「地域と映画文化」、セクション２「映画パンフレットの世界」、セクション３「制作の舞台裏」に決定し、筆者を含め当館の職員が映画館プログラム、映画パンフレット、映画脚本120点の展示資料を選定した。

このうち、セクション１「地域と映画文化」、セクション３「制作の舞台裏」で展示した資料の一部は、県内の映画資料所蔵機関である静岡県立中央図書館、木下恵介記念館、特定非営利活動法人トータルケアセンター「浦岡敬一のシゴト部屋」から借用した。

また、デザインチームの４名が、会場の空間設計、展示什器・木製ストゥールの制作、解説スクリーン、キャプション、展示目録（ハンドアウト）、DM、大学ホームページへ掲載する展覧会情報の作成等グラフィックデザイン全般について担当した。

会期中のイベントは、金沢のミニシアター、シネモンド代表・一般社団法人こども映画教室®代表理事の土肥悦子氏に講演を依頼し、併せてプロジェクトメンバーの教員２名とのトークセッションを行うことを決定した。（要申込・定員制）

広報活動では、事務局地域連携室の協力を得て展覧会情報のプレスリリースを各新聞社に配布した。地元タウン誌『浜松百撰』への記事の掲載、静岡県図書館協会加盟館、東海地区大学図書館協議会加盟館、浜松市文化協会、映画関係機関等へのDM発送等による情報提供、協力名義の依頼、資料借用手続き、展示に関わる著作権処理は、すべて当館の職員が行った。

トークイベントの会場設営、記録、配信、展覧会受付業務は、事務局地域連携室と本学学生の協力を得て行った。

また、会場での新型コロナウイルス感染症拡大防止対応として、来場者へマスク着用とアルコール消毒、入場時の検温を依頼するほか、一部保護の必要な資料を除き、展示資料を手に取って鑑賞していただくために、受付で使い捨て手袋を配布し着用をお願いすることとした。

３．展覧会概要

会期：2021年３月４日（木）～ ４月６日（火）
　　11時～ 18時
休館：3/7、3/11 ～ 13、3/22 ～ 23
場所：静岡文化芸術大学　ギャラリー
主催：静岡文化芸術大学　文化・芸術研究センター
協力：静活株式会社、静岡県立中央図書館、木下恵介記念館（浜松市旧浜松銀行協会）［指定管理者：浜松創造都市協議会・東海ビル管理グループ］、特定非営利活動法人トータルケアセンター「浦岡敬一のシゴト部屋」
什器設計：LAP（laplab.jp）
制作協力：ファブラボ浜松テイクスペース
企画・運営総括：池田泰教、加藤裕治、的場ひろし
資料選定：土屋麻子、井出直樹
グラフィックデザイン：博多哲也
空間設計：髙部亘、根木隆之、池田泰教

3.1　展示空間

展示資料は、セクション１の映画館プログラム以外は、原則一資料に一台の什器（木製ストゥール）を使用し、什器は大きさや高さを変え、資料は平置きするものと立てるものを混在させた。什器の上に立てて展示する場合はアクリル製のブックスタンドを使用し、資料を開いた状態に固定する補助具は天竜川の石を使用した。鑑賞のルートはあえて明示せず、鑑賞者が自由にテキストを読む雰囲気を創出した。

3.2　展示内容

セクション１　地域と映画文化（**図１**）[4)]

1930年代から1950年代の静岡市内での映画受容を知る手がかりとして、静活が経営していた映画館の上映館プログラムを中心に展示した。

また、静活の創業から映画館を閉鎖した2011年までの映画館の歴史を、当時の写真と共に年表を作成して表現した（**図２**）[5)]。この時期に静活が

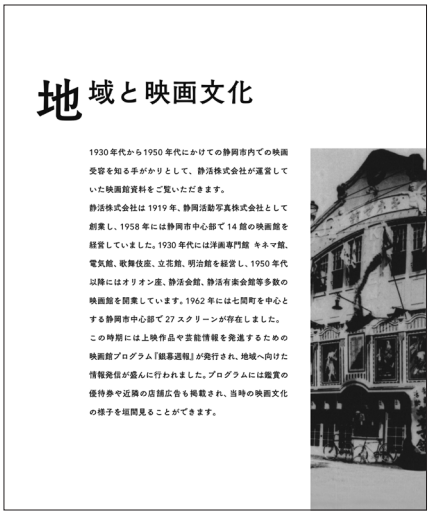


図１　解説スクリーン§１地域と映画文化

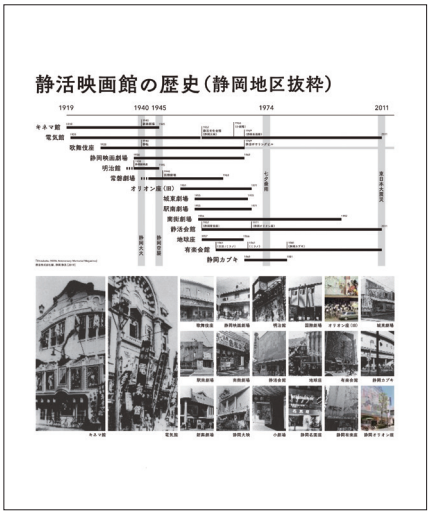


図２　解説スクリーン§１静活映画館の歴史
（静岡地区抜粋）

図３　解説スクリーン§２映画パンフレットの世界

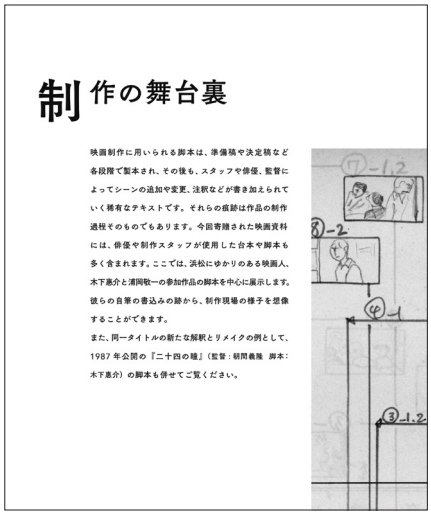


図４　解説スクリーン§３制作の舞台裏

図５　解説スクリーン§３浦岡の加筆脚本

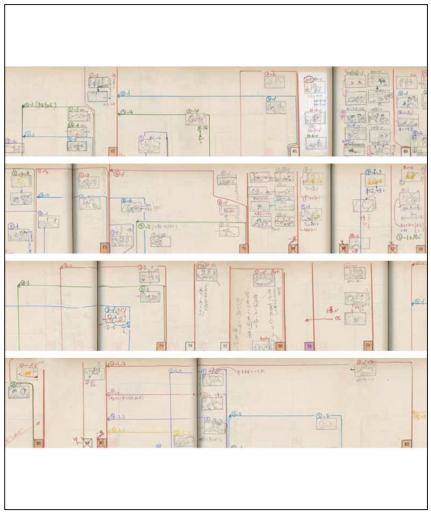


図６　解説スクリーン§３浦岡の加筆の一部

制作・発行していた映画館プログラム『銀幕週報』には、鑑賞の優待券や近隣の店舗広告が掲載されており、映画館が地域振興の役割を担っていた様子がうかがえる。
展示作品：映画館プログラム12点　年表「静活の映画館の歴史」（静岡地区抜粋）

セクション２　映画パンフレットの世界（**図３**）

寄贈を受けた映画パンフレットには、静活での封切作品のほかに東京のミニシアターで上映され発行したパンフレットが多数含まれていた。また、ある一定の年代に制作されたパンフレットには、一つの作品に対して表紙のデザインや中身の異なるものが複数存在していた。時代の変化とともに掲載内容も充実する映画パンフレットの魅力を紹介するために、このセクションでは、会期を前・後期に分け、展示資料をすべて入れ替えた。

展示前期（3/4 ～ 3/21）では静活の封切作品を中心に、1950年代から2000年代までに上映された映画パンフレットを年代別に展示した。展示後期（3/24 ～ 4/6）では、1980年代から1990年代までのミニシアター文化とパンフレットの多彩なデザインに注目し、ミニシアターでの上映作品群と一つの作品で複数の異なる内容のパンフレットを並列して展示した。
展示作品：映画パンフレット　前期：40点　後期：38点

セクション３　制作の舞台裏（**図４**）

映画制作で用いられる脚本は、制作過程によって「準備稿」「改訂稿」「決定稿」など各段階で製本される稀なテキストである。今回寄贈を受けた脚本には、制作スタッフの書き込みの跡が残るものが多数あり、これらは、映画制作の過程が垣間見える貴重な資料である。本展では、浜松にゆかりのある映画人、浦岡敬一と木下惠介[6]の作品を中心に展示した。

映画編集者浦岡敬一は、小津安二郎監督作品などの編集助手を経て、1958年『人間の條件』（小林正樹監督、1959年公開）で編集技師となり、その後も『青春残酷物語』（1960年公開）『日本の夜と霧』（1960年公開）『東京裁判』（1983年公開）など多くの話題作を担当した。

浦岡の作品では、『優駿 ORACION』（1988年公開）脚本検討稿、準備稿II、決定稿を並列して展示するだけでなく、浦岡の脚本への加筆部分に着目し、新たにスクリーンを制作して展示した（**図５**[7]，**６**）。

木下惠介の監督作品『二十四の瞳』（1954年公開）は、木下が使用した台本と、同一タイトルの新たな解釈とリメイクの例として1987年に公開された『二十四の瞳』（監督：浅間義隆　脚本：木下惠介）の脚本を併せて展示した。

脚本と映画パンフレット双方がある作品は、セクション２で同作品のパンフレットも展示し、テキストの対比ができるように配慮した。
展示作品：映画脚本　29点

その他、会場出入口付近２か所に、展示資料に関連した書籍を20冊程度配置した。書籍は来場予定の映画関係者に関わる著作も含め、適宜入替えを行い、来場者が展覧会鑑賞後自由に閲覧できるようにした（**図12**）。

書籍を配置した什器は、展示場内と同様のストゥールを用い、来場者が書籍を読んだり、アンケートを記入する際のテーブルや椅子としても利用可とした。

3.3　講演会とトークセッション

2021年３月25日（木）13：30 ～ 15：30　会場のギャラリー前のフロアで、土肥悦子氏の講演会と本学教員によるトークセッションが行われた。

新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、一般聴講者の参加の可否については開催間際まで議論が続けられたが、定員20名のところ18名の応募者があり、その他多数の学内関係者の参加もあって、会場は立ち見が出る盛況となった（**図13, 14**）。

地域と映画文化の架け橋となる実践を数多くしてこられた土肥氏の報告に、多くの参加者が刺激を受け、終了後も議論を続ける様子が見られた。

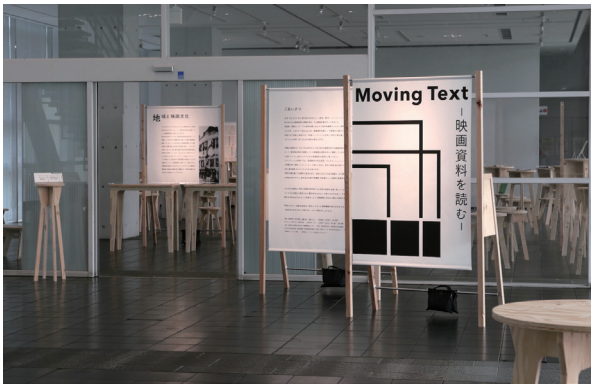


図７　会場エントランス

図11　展示の様子

図８　展示の様子

図12　会場出入口周辺に設置した書籍

図９　展示の様子

図13　講演会とトークセッション

図10　展示の様子

図14　講演会で行われたワークショップの様子

４．来場者の声とアンケート結果

展覧会開催期間は28日間、来場者数370名、そのうち、アンケート回答者は270名、回収率は73％であった。

年度末の本学学生が春休み期間中の開催となり、当初、集客について難色を示す声もあったが、会期前期（3/4 ～ 3/21）では、10代、20代の来場者が全体の51％を占め（うち大学生は38％）、本学学生が熱心に鑑賞している様子がうかがえた。アンケートで「とてもよかった」「よかった」と回答した割合は97％に上った（**図15**）。自由記述欄の回答も79％、44％と思いのほか高く、展覧会に好意的な印象を持ったものが多かった。

なかでも、「手にとって触れて読むことが可能という展示形式がおもしろい」「ふだん見られない貴重な資料を手にとって楽しめた」「脚本の加筆、修正など映画制作の過程を見ることができてよかった」「映画パンフレットの比較がおもしろかった」「展示構成、空間構成が良かった」「什器も素敵」「他の資料も見たい」等の感想は数多く寄せられていた。同時に「小さくてもよいのでどのように貴重か（展示資料に）説明がほしかった」「情報発信が弱い」という意見もあった。キャプションの表示やSNSも視野に入れた広報のあり方が、今後の課題として残った。

また、映画関係者の来場は、資料のアーカイブ化について直接意見を交わす貴重な機会となり、今後の映画資料の活用について本学と当館への期待が込められていると感じた。

５．おわりに

映画資料の寄贈を受けたとき、初めてふれる資料も多く、整理業務は苦労の連続であった。しかし、長い期間資料と向き合ったことが、地域に埋もれた新たな資料の発見につながり、『全国映画資料館録2020』掲載への道を拓いた。無駄な作業はひとつも無かった。

会場で「もっと多くの資料を観たいです」という感想をしばしば耳にした。今後、大学や図書館だけでなく、映画関係機関や美術館、博物館等と連携し、当館の蔵書を用いた企画を実現することができれば、より魅力的な地域との交流が可能になると考えている。

最後に、多忙な業務の合間を縫って共に展覧会の運営を担ったプロジェクトメンバーとさまざまなお力添えをたまわった関係のみなさまへ深く感謝し、結びの言葉としたい。

注

1）平成30年度文化庁の委託調査研究事業「文化関係資料アーカイブ構築の調査研究」の一環として、放送局や博物館等の施設に所蔵されている脚本（図書として出版されたものを除く）の実態調査のうち、大学図書館へ依頼されたアンケートによる所蔵調査。一般社団法人日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムが主体となる活動として行われた。

2）国立映画アーカイブ、映像産業振興機構が編集し、文化庁、国立映画アーカイブが発行した冊子。全国の映画資料（ノンフィルム）所蔵館のコレクション内容や展示活動等の情報がまとめられている。2010年版、2015年版もある。2020年版は以下のURL からも全文の閲覧が可能。（2021年８月31日参照）https://www.vipo.or.jp/u/zenkokueigashiryokanroku2020.pdf

3）映画編集者。1930年伊豆下田生まれ、2008年没。1958年日本映画編集協会（現・日本映画・テレビ編集協会）を発足し、編集者の自立や後進の育成に尽力した。晩年は家族とともに浜松で暮らす。浜松では地元タウン誌『浜松百撰』主催の映像塾で講師を務めた。著書に『映画編集とは何か－浦岡敬一の技法』平凡社，1994年がある。

4）11行目　誤：発進　正：発信

5）制作にあたって静活株式会社、株式会社ピーエーシーより資料の提供を受けた。

6）映画監督、脚本家。1912年浜松生まれ、1998年没。2011年10月２日、静活の映画館オリオン座の終幕では、代表作『二十四の瞳』（1954年公開）が上映された。

7）２行目　誤：『人間の条件』正：『人間の條件』

参考文献

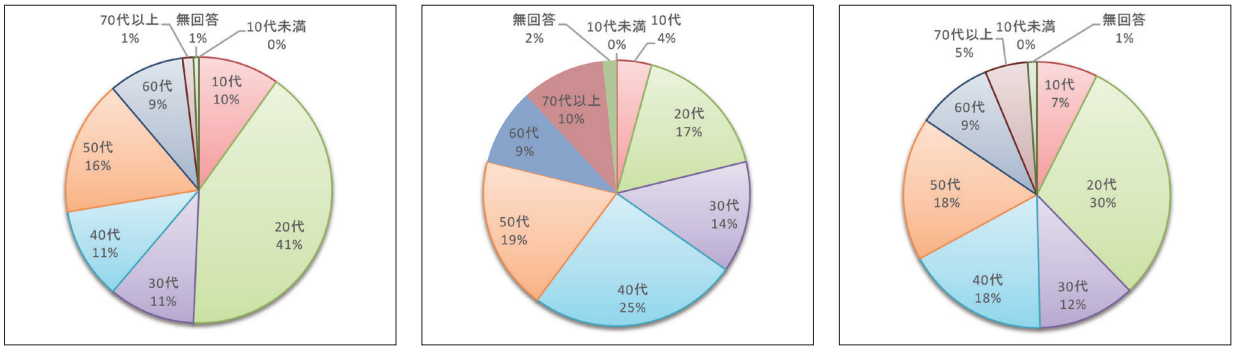
1）佐藤忠男編『日本の映画人：日本映画の創造者たち』日外アソシエーツ，2007.6

2）静活株式会社編『Shizukatsu 100th Aniversary Memorial Magazine』静活，［2019］

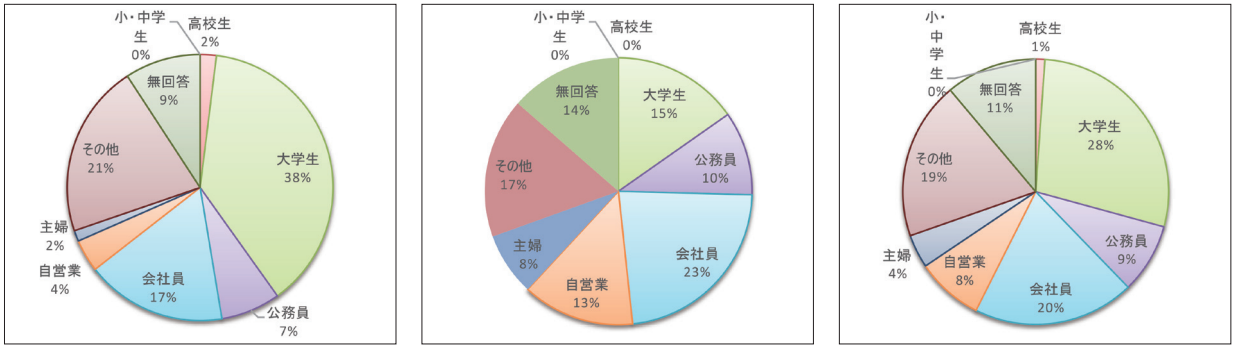
3）静岡商工会議所静岡市産業百年物語編纂委員会編『静岡市産業百年物語』静岡商工会議所，1968

4）「静岡映画館物語」編集委員会編『映画館：わが青春のスクリーン静岡映画館物語』［「静岡映画館物語」編集委員会］，2009.3

■年齢　　前期　　後期　　全体

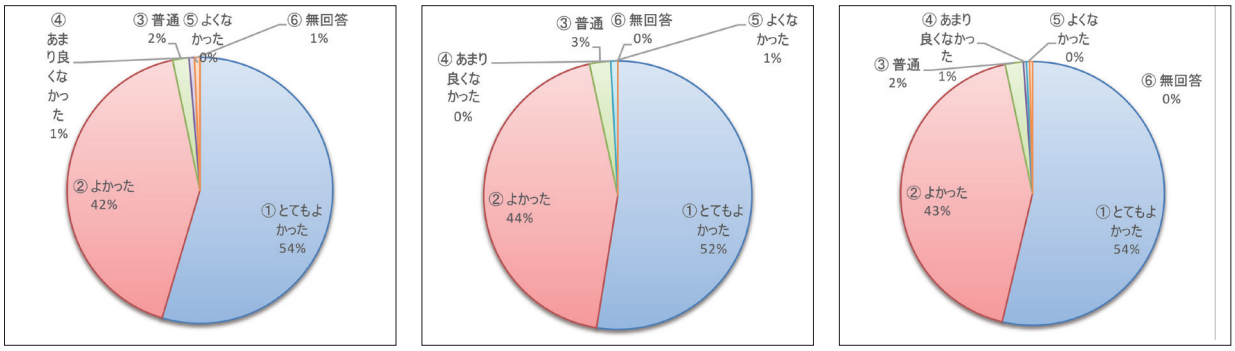


■職業　　前期　　後期　　全体



Q２．映画資料展「Moving Text －映画資料を読む－」はいかがでしたか？

前期　　後期　　全体



Q４．どの展示が一番印象に残りましたか。

前期　　後期　　全体

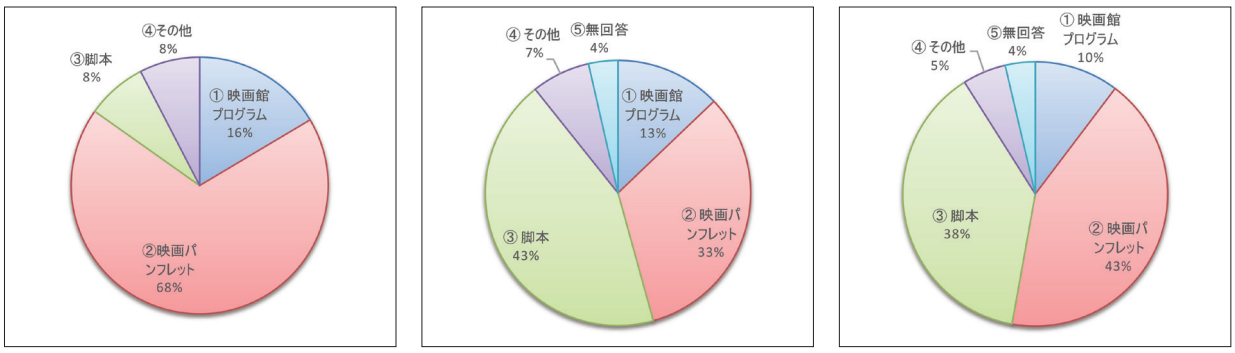


図15　来場者アンケート結果抜粋

Moving Text

―映画資料を読む―

2021年3月4日(木)・4月6日(火)
静岡文化芸術大学ギャラリー
静岡県浜松市中区中央二丁目1番1号
Tel:053-457-6124 / Fax:053-457-6125
Mail:text@suac.ac.jp

1979 ウルトラマン：怪獣大決戦　脚本：金城哲夫　上原正三　千束北男　山田正弘　若槻文三
1979 プルトニウムラブ　第二稿　脚本：レナード・シュレイダー　長谷川和彦
1979 太陽を盗んだ男　脚本：レナード・シュレイダー　長谷川和彦
1980 父よ母よ！　脚本：木下惠介
1980 父よ母よ！　最終稿　脚本：木下惠介
1981 ええじゃないか　準備稿　脚本：今村昌平　宮本研
1981 ええじゃないか：ニッポン狂乱節　脚本：今村昌平　宮本研
1983 この子を残して　脚本：山田太一　吉田一夫　木下惠介
1983 この子を残して　最終決定稿　脚本：山田太一　木下惠介
1987 二十四の瞳（リメイク）　脚本：木下惠介
1988 優駿ORACION　検討稿　脚本：池端俊策
1988 優駿ORACION　準備稿II　脚本：池端俊策
1988 優駿ORACION　決定稿　脚本：池端俊策
1990 曖・昧・Me　準備稿　脚本：伊藤尚子
1990 曖・昧・Me　脚本：伊藤尚子
1991 風の国　決定稿　脚本：戸井十月
1993 結婚　準備稿　脚本：浦沢義雄
1993 結婚　決定稿　脚本：浦沢義雄
1993 きこぱたとん　完成台本　脚本：鷺樹丸
1995 眠れる美女　脚本：石堂淑朗
1995 眠れる美女　決定稿　脚本：石堂淑朗

スタッフ

企画・運営総括　池田泰教　加藤裕治　的場ひろし
資料選定　土屋麻子　井出直樹
グラフィックデザイン　博多哲也
什器設計　LAP
空間設計　高部亘　根木隆之　池田泰教
主催　静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
協力　静活株式会社　静岡県立中央図書館　木下惠介記念館（浜松市旧浜松銀行協会）［指定管理者：浜松創造都市協議会・東海ビル管理グループ］　特定非営利活動法人トータルケアセンター「浦岡敬一のシゴト部屋」
制作協力　ファブラボ浜松テイクスペース

- 3 -

1 地域と映画文化

1936 春の映画御案内
1936 静岡映画劇場週報　No.23
1936 カブキ座週報　No.483
1937 カブキ座週報　No.537
1939 SHIZUOKA KABUKI-ZA　No.13
1941 歌舞伎座 配布プログラム
1941 静活・静映映画案内　No.7
1941 映画と演芸回覧板
1942 静岡映画劇場 配布プログラム
1953 静岡銀幕週報スクリーンウィークリー　199号
1954 静岡銀幕週報スクリーンウィークリー　209号
1956 静岡銀幕週報スクリーンウィークリー　352号

2 映画パンフレットの世界（展示前期）

※西暦は日本公開年
1953 雨に唄えば　監督：ジーン・ケリイ
1954 ローマの休日　監督：ウィリアム・ワイラー
1954 二十四の瞳　監督：木下惠介
1955 エデンの東　監督：エリア・カザン
1955 裏窓　監督：アルフレッド・ヒッチコック
1962 太陽はひとりぼっち　監督：ミケランジェロ・アントニオーニ
1963 天国と地獄　監督：黒澤明
1966 マンハッタンの哀愁　監督：マルセル・カルネ
1968 俺たちに明日はない　監督：アーサー・ペン
1968 卒業　監督：マイク・ニコルズ
1970 ひまわり　監督：ビットリオ・デ・シーカ
1970 暗くなるまでこの恋を　監督：フランソワ・トリュフォー
1972 ゴッドファーザー　監督：フランシス・フォード・コッポラ
1972 フェリーニのローマ　監督：フェデリコ・フェリーニ
1974 砂の器　監督：野村芳太郎
1977 幸福の黄色いハンカチ　監督：山田洋次
1978 野性の証明　監督：佐藤純弥

- 1 -

1979 太陽を盗んだ男　監督：長谷川和彦
1979 衝動殺人 息子よ　監督：木下惠介
1980 クレイマー、クレイマー　監督：ロバート・ベントン
1980 父よ母よ！　監督：木下惠介
1981 ええじゃないか　監督：今村昌平
1981 泥の河　監督：小栗康平
1982 E.T.　監督：スティーブン・スピルバーグ
1983 時をかける少女　監督：大林宣彦
1984 ゴーストバスターズ　監督：アイバン・ライトマン
1985 アマデウス　監督：ミロス・フォアマン
1985 バック・トゥ・ザ・フューチャー　監督：ロバート・ゼメキス
1987 マルサの女　監督：伊丹十三
1988 優駿 ORACION　監督：杉田成道
1988 ラストエンペラー　監督：ベルナルド・ベルトルッチ
1992 牯嶺街少年殺人事件　監督：エドワード・ヤン
1992 欲望の翼　監督：ウォン・カーウァイ
1994 オリーブの林をぬけて　監督：アッバス・キアロスタミ
2003 ほえる犬は噛まない　監督：ポン・ジュノ
2004 スウィングガールズ　監督：矢口史靖
2004 21グラム　監督：アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ
2007 めがね　監督：荻上直子
2007 迷子の警察音楽隊　監督：エラン・コリリン
2008 胡同の理髪師　監督：ハスチョロー

3 制作の舞台裏

※西暦は日本公開年
1954 二十四の瞳　脚本：木下惠介
1954 二十四の瞳　脚本：木下惠介
1954 二十四の瞳　脚本：木下惠介
1961 人間の条件　完結編　第五部・第六部　脚本：松山善三　小林正樹　稲垣公一
1968 爽春　準備稿　脚本：松山善三
1970 風の慕情　脚本：橋田壽賀子
1977 八甲田山：HAKKODA-SAN　外国語翻訳版　脚本：橋本忍
1979 衝動殺人　息子よ　決定稿　脚本：砂田量爾　木下惠介

- 2 -

1 地域と映画文化

1936 春の映画御案内
1936 静岡映画劇場週報　No.23
1936 カブキ座週報　No.483
1937 カブキ座週報　No.537
1939 SHIZUOKA KABUKI-ZA　No.13
1941 歌舞伎座 配布プログラム
1941 静活・静映映画案内　No.7
1941 映画と演芸回覧板
1942 静岡映画劇場 配布プログラム
1953 静岡銀幕週報スクリーンウィークリー　199号
1954 静岡銀幕週報スクリーンウィークリー　209号
1956 静岡銀幕週報スクリーンウィークリー　352号

2 映画パンフレットの世界（展示後期）

※西暦は日本公開年
1984 ドレッサー　監督：ピーター・イエーツ（CINEMA SQUARE MAGAZINE No.23）シネマスクエアとうきゅう
1986 黄色い大地　監督：陳凱歌（CINEMA SQUARE MAGAZINE No.43）シネマスクエアとうきゅう
1988 さよなら子供たち　監督：ルイ・マル　シネセゾン
1991 蠅の王　監督：ハリー・フック　シネセゾン
1926 狂った一頁　リバイバル　監督：衣笠貞之助（エキプ・ド・シネマ No.8）岩波ホール
1928 十字路　リバイバル版　監督：衣笠貞之助（エキプ・ド・シネマ No.8）岩波ホール
1980 大理石の男　監督：アンジェイ・ワイダ（エキプ・ド・シネマ No.42）岩波ホール
1980 メキシコ万歳　監督：セルゲイ・エイゼンシュテイン（エキプ・ド・シネマ No.39）岩波ホール
1981 チェスをする人　監督：サタジット・レイ（エキプ・ド・シネマ No.45）岩波ホール
1981 株式会社 ザ・カンパニー　監督：サタジット・レイ（エキプ・ド・シネマ No.45）岩波ホール
1977 西陣心中　監督：高林陽一（アートシアター 128号）日本アート・シアター・ギルド
1979 もう頬づえはつかない　監督：東陽一（アートシアター 140号）日本アート・シアター・ギルド
1980 ヒポクラテスたち　監督：大森一樹（アートシアター 142号）日本アート・シアター・ギルド
1984 さらば箱舟　監督：寺山修司（アートシアター［15号］）日本アート・シアター・ギルド
1987 紳士協定　監督：エリア・カザン（シャンテ・シネ No.1）シャンテ・シネ
1988 ベルリン・天使の詩　監督：ヴィム・ヴェンダース（シャンテ・シネ No.6）シャンテ・シネ

- 1 -

1990 冬冬の夏休み　監督：侯孝賢（ホウ・シャオシェン）（シャンテ・シネ No.15）シャンテ・シネ
1992 ナイト・オン・ザ・プラネット　監督：ジム・ジャームッシュ（シャンテ・シネ No.27）シャンテ・シネ
1988 モーリス　監督：ジェイムズ・アイヴォリィ（シネスイッチ Vol.2）シネスイッチ
1988 ワールド・アパート　監督：クリス・メンゲス（シネスイッチ Vol.5）シネスイッチ
1989 ニュー・シネマ・パラダイス　監督：ジュゼッペ・トルナトーレ（シネスイッチ Vol.13）シネスイッチ
1991 過ぎゆく時の中で　監督：ジョニー・トゥ（シネスイッチ Vol.17）シネスイッチ
1983 パッション　監督：ジャン＝リュック・ゴダール（CINE VIVANT No.1）シネ・ヴィヴァン六本木
1984 ノスタルジア　監督：アンドレイ・タルコフスキー（CINE VIVANT No.4）シネ・ヴィヴァン六本木
1985 ミツバチのささやき　監督：ビクトル・エリセ（CINE VIVANT No.8）シネ・ヴィヴァン六本木
1987 緑の光線　監督：エリック・ロメール（CINE VIVANT No.20）シネ・ヴィヴァン六本木
1965 サウンド・オブ・ミュージック　監督：ロバート・ワイズ
1965 サウンド・オブ・ミュージック　リバイバル　監督：ロバート・ワイズ　発行：東宝
1967 天使の詩　監督：ルイジ・コメンチーニ　発行：日本ヘラルド映画／東宝
1967 天使の詩　監督：ルイジ・コメンチーニ　発行：大阪映画実業社
1968 ロミオとジュリエット　監督：フランコ・ゼッフィレッリ　発行：東宝
1968 ロミオとジュリエット　監督：フランコ・ゼッフィレッリ　発行：［松竹］
1979 旅芸人の記録　監督：テオ・アンゲロプロス　発行：東宝
1979 旅芸人の記録　監督：テオ・アンゲロプロス　発行：岩波ホール
1979 あゝ野麦峠　監督：山本薩夫　発行：東宝
1979 あゝ野麦峠　監督：山本薩夫　発行：新日本映画
1980 ルードウィヒ 神々の黄昏　監督：ルキノ・ヴィスコンティ　発行：岩波ホール
1980 ルードウィヒ 神々の黄昏　監督：ルキノ・ヴィスコンティ　発行：東宝

3 制作の舞台裏

※西暦は日本公開年
1954 二十四の瞳　監督：木下惠介
1954 二十四の瞳　監督：木下惠介
1954 二十四の瞳　監督：木下惠介
1961 人間の条件　完結編　第五部・第六部　監督：松山善三　小林正樹　稲垣公一
1968 爽春　準備稿　監督：松山善三

- 2 -

資料１　前後期展示目録（ハンドアウト）　2021年３月４日～ ４月６日

注：３制作の舞台裏　４行目　誤：人間の条件　正：人間の條件

注：２パンフレットの世界　前・後期で展示入替　中段：前期目録　下段：後期目録

Moving Text

－映画資料を読む－

静岡文化芸術大学 ギャラリー ｜ 2021.3.4 —— 4.6 11:00-18:00 ㊡3.7, 11-13, 22-23 ※4.6 15:00 close

Moving Text

－映画資料を読む－

本展では 1950 年代から 2000 年代までの映画資料の中から「地域と映画文化」「パンフレットの世界」「制作の舞台裏」という 3 つのキーワードをあげ、約 120 点の資料を紹介します。監督台本に書き込まれた直筆の推敲跡、失われた映画館のチラシ文、時代を象徴する映画パンフレット、様々な資料を固定された懐古的なものと捉えるのではなく、いまなお運動を続ける『動いているテキスト』として捉え直すことで、時代の変化を含んだ豊かな表現が見えてきます。

什器設計：LAP　制作協力：ファブラボ浜松テイクスペース
協力：静活株式会社、静岡県立中央図書館、木下恵介記念館（浜松市田浜松銀行協会）『指定管理者：浜松創造都市協議会・東海ビル管理グループ』、特定非営利活動法人トータルケアセンター「浦岡敬一のシゴト部屋」

講演＋トークセッション

ミニシアターでの経験と こども映画教室の活動

日時： 2021 年 3 月 25 日（木）13:30-15:40
場所： 静岡文化芸術大学 ギャラリー前
- 13:30-14:30　講演
  土肥悦子（シネモンド代表 / 一般社団法人こども映画教室代表理事）
- 14:40-15:40　トークセッション
  加藤裕治（静岡文化芸術大学文化政策学部教授）
  池田泰教（静岡文化芸術大学デザイン学部講師）

参加料： 無料（要事前申込み / 定員制）
連絡先： 静岡文化芸術大学 情報室図書係
Tel： 053-457-6124 / Fax：053-457-6125
Mail： text@suac.ac.jp（担当：土屋）
※ 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、今後の状況により中止する場合があります。

JR 浜松駅より徒歩 15 分
遠州鉄道「遠州病院駅」下車 徒歩 8 分
静岡県浜松市中区中央二丁目 1 番 1 号

公立大学法人
静岡文化芸術大学
SUAC

資料２　展覧会DM　上段：表　下段：裏